飛行艇対B17（空の要塞）一騎打ち

日辻常雄
沼袋三丁目

私は旧制中学から海軍兵学校に進み、海軍の航空隊で水上機、飛行艇のパイロットとして勤務し、日中戦争、太平洋戦争を戦い抜いて終戦を迎え、不思議に生き残っている者である。

この間日中戦争で六五回、太平洋戦争で三一五回の航空戦闘を体験し、今回が最期と決意したことは何回かあったが、そのうちでも印象に残っている空中戦について書いて見たい。

「敵機ッ、右後方近いッ」、尾部見張員からの急報が来た。「空戦配備につけッ」と叫びながら私は全速で超低空に降下した。

昭和十七年十一月二一日〇七〇〇、ソロモン群島ガダルカナル島の南一五〇海里の洋上である。

連日のように飛行艇の未帰還機が続出し、血みどろの戦いが続いていたが、相手の敵機が何者なのかは未だに確認できていなかった。

「ヒ」（敵飛行機見ゆの無電暗号）連送が精一杯。直ちに射ち合いが始まり、そのうちにやられてしまう。空中戦をやって還ってくるという飛行艇はほとんどいなかった。ソロモンの激戦場ではこれが未帰還機のパターンである。

この日までにわが飛行艇隊は十六機（搭乗員一九二名）が未帰還、今日もまた激戦が予想されていた。この日、私は飛行長の前で心の中に誓いをたてた通り、十七機目の未帰還を決意して出撃したのである。

空中戦は極力さけて、任務達成に努力するのが索敵機の本分である。しかしながら今、この場で対峙した以上、空戦はさけられない。

私は早期決戦を決意した。右後上方に占住して悠々と追尾してくる敵機B17。敵はおそらくガダルカナル飛行場に通報して僚機を呼んでいるに相違ない。ぐずぐずしていては面倒なりと左へ急旋回、反航体勢で突っ込んだ。

高速のB17と低速の九七式大艇とでは、旋回圏の大小の差のみが、敵につけ入る唯一の活路である。急に反転されて、敵は泡くった。このチャンスを逃がしてたまるか。尾部の二〇ミリ機銃を一連射浴びせたところ、幸いにも敵機の左中央エンジン

を貫いたらしい。パッと火を吹いたのち、長く黒煙を引きながら遁走、意外にこの勝負はあっさりとついた。

幸先よし。しかし、このままではすまんぞという気がしてならなかった。

「今のうちに朝食をすませておけ」と命令して、自分も指揮官席に戻って弁当を開いた。と、副操縦士が何も言わずに左前方を指さした。よく見ると、雲に隠れながら新たにB17が一機、食ってかかるように向かって来た。

「空戦だッ」と叫びながら、弁当をなぐり捨てて指揮官席に立ち上がった。機内にはサーッと殺気がみなぎる。空戦準備を完了して全員が機銃配置についた。風防越しに前方銃座の射士の不敵な笑顔が見える。頼もしい限りだ。高度三〇メートル、速力一五〇ノットで基地方向に針路をとる。「さあ来い」刻々射ち合いが迫る。

敵は高速を利用し、わが前方を抑えるごとく、どんどん追い越して行く。「くるぞーッ」。第一撃は敵の前方銃とわが右舷四門の機銃が火を吐いた。ともに命中弾なし。敵は、交差するとすぐ前方に出て、われを左右から交差するように攻撃をしかけて来た。低空戦闘なので射ち合う毎に機銃弾の弾着があたり一面の海面を真っ白に波立たせている。まことに不気味である。第四撃目交差した瞬間、敵の十三ミリ機銃弾が一発わが搭乗員席を貫いた。

「畜生ッ」という声が聞こえ、硝煙の中で誰かが倒れるのを見た。振り向くと整備員と電信員の二名がやられていた。電信員は送信中の右腕が関節部から折れてぶらさがっている。整備員は左腕を抱えたまま倒れて「ガソリン、ガソリン」と叫んでいる。

「飛行士ッ、手当をしろッ」とどなりながら、首のマフラーをとって投げつけた。タンク室を見ると、ガソリンが音を立てタンクから吹き出している。火がつかないのが不思議だ。

敵の攻撃は執拗だ。命中音が機体の各部からひびいてくる。しかし、火はふかない。四つのエンジンも全力運転を続けている。

六撃目、「ガチーン」という音とともに、パイロット席の前方艇底部に大穴があいた。低空なので下の波頭が見える。私の頭の中にふとひらめいた。「こいつは今までに何機の大艇を食っている。こいつだッ。大艇未帰還の原因は敵戦闘機との空戦ではない。B17だッ。索敵機同志の空中戦だったのだ。よーしッ、何としてもこいつを撃墜してやる。十七機目の未帰還は必ず食い止めて見せる」。

私は拳銃を取り出した。

「最後は俺が言うから体当たりをやるぞッ」主操の肩を叩くと、大きくうなずいた。

「これでよし」肚がすわった。私は体当たりの際、クルーよ

り一足先に拳銃で自決する覚悟を決めていたのである。指揮官席の右壁が熱いので調べると、十三ミリ機銃弾が一発食い込んでいた。搭乗員二名を傷つけた弾丸である。私が立ち上がっていなかったなら、この一弾は更に私の腰を砕いていたに違いない（この弾丸は記念に保管している）。

交戦開始後二時間、敵の射撃も大分衰えて来た。副操が突如機首を下げた。波頭が目前に迫る。ふと目をやると敵が真横から突っ込んで来たのだ。恐らくわが下方にもぐって艇底から射ちこもうとしたに違いない。副操が機敏にこれを防いだのである。敵はわが尾部の後下方至近を横切る結果となり、わが尾部銃（二〇ミリ機銃）の猛射をうけ、パイロットがやられたのか、右から大きくわれに覆いかぶさるように迫ったが、敵の機銃はほとんど射撃しておらず、その左翼からガソリンの尾を引きながらガダルの方向に遠ざかっていった。「勝ったぞッ」思わず声が出た。しかし最早追跡する力は残っていなかった。

B17二機と二時間に及ぶ空中戦、射ち合った機銃は各七門宛計十四門。敵を撃退できたものの索敵行動は打切り、引き返す以外にはない。搭乗員は重傷二名、被弾多数、機銃残弾各銃一弾倉、燃料はタンクを射ちぬかれたが、床部分が残ったために残燃料は二時間分、基地までぎりぎり、幸いにも無線は無事であった。早速基地に報告した。

「B17二機と約二時間交戦、重傷二名、被弾多数、燃料漏洩残二時間、基地の南東二百海里を帰投中、不時着するやも知れず、〇九二〇」

報告は悲壮なものだが、機内の空気は明るかった。重傷者は基地まではもつだろう。（実際は元気だった。帰投後野戦病院で手術、治療。二名とも終戦後元気に勤務している。）

基地までの飛行は約一時間半、燃料節約、重傷者の介護、故障箇所の調査は勿論、万一これ以上会敵すれば最期がくることは明らかであり、総員真剣な見張りを続けたことは勿論である。自ら操縦桿を握り、〇九三〇基地上空着。沈没の恐れもあり、砂浜の最短距離に着水して無事擱座（かくざ）できた。ザザザーッという底体の砂にのった感触に、ああ生きて還ったという実感がこみあげた。

司令の前に報告のため整列した面々は、何れも血と油と海水にまみれていた。

「よく生還してくれた。有難う」司令が手をのばして握手を求められた。

調査の結果、翼内一番タンクは火災を起こしていたが自然消火していた。艇体の被弾九六発、わが愛機、よくぞ飛んでくれた。

この空中戦は私にとって一生忘れ得ないものとなった。私の生還が、飛行艇の空戦防御強化対策実現の糸口となったからである。

即ち、ソロモン索敵隊の敵は米軍の索敵機B17であり、大型哨戒機同士の空戦という予想もしなかった事実が立証されたのである。

あの空戦、二時間の死闘、とにかく飛行艇の未帰還は十七機目で食い止めることが出来たのである。

（筆者註）

・B17

四発の米陸軍の陸上爆撃機。終戦前日本空襲に活躍したB29の前身である。乗員約十名、搭載装備の機銃は四〇ミリ機関砲をはじめ十三ミリ機銃で更に防弾装備があり、高速の強敵であった。

・日本の飛行艇

九七式大型飛行艇、四発、航続距離四千海里。後半二式大型飛行艇が誕生し、長距離哨戒攻撃等に威力を発揮したが、この時点では九七式大艇のみが使用された。乗員（戦時）十一名、搭載機銃は二〇ミリ、七・七ミリの小火器で防弾装備は初期にはなかった。